



W.A.Mozart Hiroba

「モーツァルト広場」 SINCE 1995

第45号

モーツァルトというワクチン

モーツァルトへの手紙 (その21)

会員番号 K.618 加藤 明



◇265歳となったモーツァルトへ

『ひとりのよき友、ひとつの安心できる場所、一冊の好きな書物、

そしてひとつのよき思い出、それがあればよき生であろう！』

佐伯啓思 (社会学者) のエッセー「いかによく生き、よく死ぬか」(コロナ下の生) より

後世のあなたの熱狂的なファンにとって、若干11歳のあなたが二度目のウィーンへの演奏旅行中、当時流行っていた天然痘に姉のナンネルともども罹ってしまい、感染症の怖さを嫌というほど体験したことはよく知られたことです。

今日では、人類の歴史の通奏低音として、こうしたパンデミックと呼ばれる疫病が常に付いて回っているかのように俯瞰できるのですね。

2019年の年の瀬から2年にも及ぶ新型コロナウイルスというパンデミックは我々の日常生活をストレートに襲撃し、いまだに先の視えない暗雲状態が続いています。感染(視えないウイルスという敵)を恐れるということと、人が人を恐れることが同義であるという異常事態をこれほど直情的に感じさせ、感染回避行動を強いられることなど、いったいだれが想像しえたでしょう？

モーツァルトよ、小生の友人には熱心な演奏家諸氏が少なくないのですが、現在の彼らのおかれている状況は極めて深刻、気の毒なものとなっているのです。

気の毒というのは、経済的に不遇というリアルな要因以上に、演奏家としてのモチベーションへのダメージがはるかに大きいと考えられるからです。

つまり、一斉にして一切の「自己実現の現場」を喪うことによる痛ましいほどの絶望感を想ってしまうのです。

ステージを要する芸術全般に言えることですが、人と人が会して成立する時間芸術、「ナマの音楽興行」の本質的な脆さの一面が露呈される予想を超えた事態。

いわく、「不要不急の外出は控えよ」、「密閉・密集・密接は避けよ」と叫ばれ続けるなかで、無力感に打ちひしがれる多くの演奏家とその演奏家を支えるたくさんの裏方さんやその演奏を愉しみにしている音楽愛好家の思いを想像し、ジンジンする痛みを分かち日々がいまも続いているのです。

◇

こうした人々の行動や交流が制限され、こころの気管支喘息みたいな日が続く中で、ある朝、

『そうだ！モーツァルトこそワクチンだ！』という内なる叫びがエコーを伴いながら体内を駆け巡りました。正に天からの「お告げ」のように・・・。

きっかけは、小生の或る昔のハプニングを思い起こしてしまったことでした。

高校卒業直後の5月、東京での新聞配達少年(?)時代に『加藤君、ホラッ、リンツだよ・・・』と非番の公園でM先輩が差し出すポータブルラジオから流れたモーツァルトのシンフォニー「リンツ」の一滴こそは、言うならモーツァルトがワクチンそのものであることを雄弁に教えてくれたのです。※会報第8号参照

モーツァルトを意識的に追い求めるようになり、「モーツァルト広場」を立ち上げたのはこの事件の25年も後のことですが、この時すでに小生には「抗体」ができていたというか、ワクチン効果が認められていたことになります。

というのは、忘れることのない「リンツ」とあの公園での「再会」が、カラカラのところに潤いをもたらせ、屈折し、うつむき加減の青二才に不意なる「喝」を入れてくれたのですから。

そしてこれは、紛れもなくモーツァルトの放つ言葉、音楽言語がいかに人間を勇気づけたり、元気を取り戻す力をもっているかの証左となるささやかなドラマに違いないのですね。



「出生は偶然、しかしその死は必然」というすべての生き物に普遍的な存在態様は避けがたく、人間にとっても生の偶然と死の必然という分母が有るが故に分子に古今東西たくさんドラマを産んできた、という感慨を懐くことがあります。

どこかの作家が《生きることは他人の死を確認すること》と、うがった言説を吐露していたことをたびたび思い出すのですが、それも、端に小生が古希を越した老境の身に達したからというだけではないようです。

現世の空気感というか世情が強いる思考の内省化が自己と他者との「関係」に目を注がせている、と言えなくもありません。

そう、たとえば「モーツァルトと小生」という一個の他人同士が固有の「関係」を構築することで、小生が新たな自己を発見し、その出逢いに感謝し、愉しみ、あなたに慈しみさえ感じる、ということが起こるのは考えてみると、とつても不思議な体験に違いないのです。

地球上に人間が誕生して数万年という途方もない時間を考えると、生誕265年、没後230年のモーツァルトはついこの間まですぐそばに居らしたような身近な存在と言えなくもないのですから。

少し時間がすれ違っただけの同じ地球上のモーツァルト！

小生がラッキーだったのは、こうして日常的にあなたが創った音楽を愉しめていること。

そう、あなたより少し後に生まれ落ちただけという、天のいたずらの所為なのです。

そう考えると、小生があその世に逝った後、モーツァルトよ、あなたを超える作曲家が活躍する時代がやってきて、あなたと二人、ひざを突き合わせて悔しがる様子を想像することもあながち無謀な妄想とは言えないのかもしれない。(笑)



過日、「モーツァルト広場」の会友A氏のご自宅に招かれ、A氏自らの手打ちによる大変贅沢な自慢のお蕎麦を頂いてきました。

A氏は元来エンジニアとして広く活躍された方ですが、独学でギター、マンドリンそしてチェロを弾いてはお仲間と音楽を愉しんで来られた根っからの楽人(真っ当な遊び人)で、いわばアマチュア演奏家の権化みたいなお人です。

音楽の愉しみ方には大別して、どちらかと言うと、④自ら作り演奏して愉しむ人間と、⑤他人が作り演奏した曲をナマであれ、CDであれ聴いて愉しむ人間とに区分されるようです(ま

あ、両刀使いだという人間も少なくないのですが・・・)。

A氏は④型の典型的な人間で、小生はもちろん③型の最たるもの。

このように音楽への向き合い方が正反対の二人ですが、何故か馬が合うのです。

A氏とは「広場」でのお付き合いを越えて、旨いお蕎麦を愉しむという共通の趣味もありました。かねてより、一度「旨い蕎麦をご馳走するから、私のうちに来てほしい」とのお誘いがあり、お言葉に甘えさせて頂いたというわけです。

蕎麦粉は福井からのお取り寄せという本格派だけあって、めったに味わえない風味とのだ越しの良さ、さらには蕎麦つゆと副菜にもこだわりが感じられるという蕎麦好きには堪らない、正に取って置きのお蕎麦ランチとなりました。

当然のことながら、お蕎麦を頂きながらの対話のテーマも多岐にわたりました。

そんな中、A氏と小生が共に行きつけで仁別方面の川沿いに建つ、知る人ぞ知るお蕎麦屋の店主Y氏に話が及ぶと自然とお喋りのトーンが落ちていきました。

というのも、ここ数日間お店は臨時休業の札を入口に垂れ下げたままで、いったいY氏はどうなってしまったのか、不透明な状態が続いているからでした。

Y氏とのお付き合いはA氏の方が長いのですが、蕎麦職人Y氏は年齢的にもほぼA氏と小生に近く、戦後間もない同世代としての親近感もあって、小生は毎度独りでお店を切り盛りするY氏を訪問するたびに、ちょっとした差し入れを持参する気の置けない仲でもありました。

A氏との対話でY氏の異変にのっぴきならない暗雲立ち込めているらしいことが直感的に感じられ、そのことが不意の寡黙を強いられた理由でした。

そして、A氏とY氏の固有な「関係」、さらにはY氏と小生の「関係」それぞれの「関係」

を我身に引きとるしかないことを悄然と悟った瞬間でもありました。

ですから、異変に絡んだ余計な詮索を嫌うその場の空気を咄嗟に意識し、内心彼の復活を祈るしかないと察し、急いで話題を変えることにしたのでした。

こうして、音楽を愛し、蕎麦が好きという共通項をもち、さらに共に蕎麦職人Y氏を慕うというA氏との奇遇を再認識することになる貴にして重い一日となったのです。



過日、何気なく同い年の佐伯啓思のエッセーを読んでいたら、冒頭に掲げた『ひとりのよき友、ひとつの安心できる場所、一冊の好きな書物、そしてひとつのよき思い出、それがあればよき生であろう！』という箴言に出くわしました。

その時は一瞬脳内がスパークし、ドキッドキッと心音が聞こえるようでした。

そして、「ああ、何か足りない！」と咄嗟に感じました。

ウン、何かもうひとつ足りないけれど、それって何だろう？と自問しました。

しばらくして、小生の内なる答えは、この名言の「一冊の好きな書物」のすぐ後に『一曲のモーツァルト』というフレーズをつけ加えたい、というものだったのです。

end

●本会報【モーツァルト広場】は今回で第45号の節目を迎えました。

振り返ると会報を年二回発行することになって23年の月日が流れたこととなります。

この間、創刊号から休むことなく寄稿頂いた幹事の一人佐藤滋氏はじめ、多くの会員諸兄のご執筆の労に対し改めて敬意と感謝を申し上げます。

今後もW・Aモーツァルトに向き合うことで得られるであろう我が人生の気づきを希求しながら、出来得る限り会報の発行を続けてまいります。

映画「アマデウス」の鑑賞と随想（中）

会員番号 K.203 松田至弘

(3)

映画「アマデウス」がどのようにして作られたのかを、関連資料や「メイキングシーン」（製作・監督ビル・チャーズィ）の解説などを参考にして明らかにしてみることにする。

1979年、ミロス・フォアマン監督は映画「ラグタイム」のキャスティングのため、ロンドンに滞在していた。折しも、ロイヤル・ナショナル・シアターで、ピーター・シェファー作の舞台劇「アマデウス」の公演が行われていた。フォアマンは、作曲家の話やその演劇には全く興味がなかったが、勧められて気が進まないままこの公演を観ることになった。



映画「アマデウス」でアカデミー賞監督賞を受賞したミロス・フォアマン（『キネマ旬報』1985年、No. 910による）



劇作家・脚本家のピーター・シェファー（Chicago Tribune による）

ところがそれは、思ってもみなかった「感動のドラマ」であり、目を疑うような素晴らしい舞台であった。フォアマンは自己の経験から、サリエーリの苦しんでいる気持ちや感情などがよく理解でき、この人物に強く心を惹かれたのであった。

フォアマンは、この劇の作者で脚本家のシェ

ファーに紹介されると、早速映画化の話を持ち掛けた。しかしシェファーは、すぐにはその話に乗らなかった。だが、フォアマンがプロデューサーのソウル・ゼインツに連絡すると、彼はすでに戯曲の名前を控えていて注目していたのである。

すでにフォアマンとゼインツは、ケン・ケーシーのベストセラー小説「カッコーの巣の上で」（マイケル・ダグラスが映画の製作権を持っていた）を映画化し、1975年度の第48回アカデミー賞で五部門（作品賞、監督賞、主演男優賞、主演女優賞、脚色賞）を受賞していた。

この映画は、自由に生きようとして慣例に従わない反権力の英雄マクマーフィとそれを妨害しようとする「抑圧的な既成社会との争い」を描いた問題作で、配給収入で莫大な収益をあげ大ヒット作品になっていた。

フォアマンとゼインツの2人は、戯曲「アマデウス」の映画化と脚本執筆の依頼を粘り強く続け、シェファーもその熱意に動かされ、遂に承諾することになった。ゼインツは初めから、映画化するとなると、モーツァルトの出番をもっと多くする必要があると考えていた。フォアマンは、“モーツァルトと音楽”をメインに、舞台劇とは全く違ったものに仕上げる決心を固めていた。

*

1982年2月、映画化に向けての3人の協力関係がスタートした。そして、フォアマンとシェファーは、コネチカットにあるフォアマンの住居で、週末の土・日を除いて4か月以上（1日12時間）を共に過ごした。ゼインツも時々そこ

に加わった。

映画「アマデウス」を作るに当たって、3人が合意した事項は次の通りであった。

- モーツァルトの出るシーンを多くする。
しかし、モーツァルトの人生を表面的に延々と描く退屈な伝記映画にはしない。事実を即した魅力的なファンタジーにする。
- 宮廷音楽家サリエリのモーツァルトに対する嫉妬と苦悩の感情、複雑な心理を、舞台用の戯曲よりも強く打ち出す。
- サリエリ、モーツァルト、それに加えて“モーツァルトの音楽”を第三のキャラクターにする。音楽が主演の映画にする。
- 戯曲にない歴史的な事実や音楽的事実をドラマのなかに組み込み充実させる。また、クライマックスの設定を戯曲とは違ったものにする。
- 観客が心を動かされ、感動できる作品、映像の美しい作品に仕上げる。

フォアマンとシェフアーはモーツァルトの音楽を聴き、お互いにあらん限りの想像力をぶつけあった。意見の大きな衝突を繰り返しながら、台本の具体的案を絞り出していったのである。

音楽監督を誰にするかということになった時、3人は音楽界の4人の重鎮の推薦を受けて、ネビル・マリナーに白羽の矢を立てた。マリナーは、バロック音楽とモーツァルト音楽の指揮者として名声を得ていた。話し合いの結果マリナーは、「モーツァルトの音符は一切いじらない」という条件で協力を約束した。

俳優の人は、難航を極めたようである。フォアマンは主役に大物俳優を起用せず、無名の俳優を抜擢することにこだわった。モーツァルトには顔の特徴があまりなく、それに“モーツァルトと音楽”で勝負するので、大物はいらぬというのがその理由だった。そしてフォアマ

ンには、主役も脇役も共に大切という信念があった。

1400人以上の応募者があったオーディションで選ばれ、長時間のスクリーン・テストを経て決定したモーツァルト役は、トム・ハルスであった。そして、サリエリ役にF・マーリー・エイブラハムが抜擢され、コンスタンツェ役にはメグ・ティリーが選ばれた。

ところが、メグ・ティリーは撮影を前に怪我をし入院することになり、再度行われたオーディションで、エリザベス・ベリッジに決定した。トム・ハルスも、F・マーリー・エイブラハムも、エリザベス・ベリッジも、当時はあまり知られていない脇役の俳優だったのである。

*

撮影の候補地に上がったのはウィーン、プラハ、ブダペストの三つの場所であったが、検討の結果、プラハに決定した。

プラハは当時、共産主義国チェコスロバキアの首都であったが、中世の街並みを色濃く残す撮影の最適地であり、また、フォアマンの故郷でもあった。

フォアマンのチェコスロバキア時代については、ほとんど知られていないので、ここで少し触れておこう。

フォアマンは1932年、チェコスロバキアのラスラフに生まれている。プラハの国立映画学校で脚本の作法と映像演出技術などを学んだ後、1963年に短編ドキュメンタリー作品で、監督としてデビューを果たした。

最初の長編映画「黒いペトル」は、国内外で高い評価を受け、1966年に「ブロンド娘の恋」、続いて68年に「火事だよ！ カワイ子ちゃん（消防士の舞踏会）」が、それぞれアカデミー賞最優秀外国語映画賞にノミネートされた。しかし、後者は国内の永久上演禁止映画に指定された。

チェコ・ヌーヴェルヴァーグの一員として脚光を浴び、ハリウッドからも誘われていたフォアマンは、1968年にパリに滞在してアメリカ映画を監督する準備に当たった。

そうしているうちに同年8月、チェコ事件（ソ連を中心とするワルシャワ条約機構軍が、チェコスロバキアに侵攻し、首都プラハを占拠した）が起こり、「プラハの春」の自由化運動が挫折することになったのである。

フォアマンはこれを機に、祖国を離れる意思を固め、アメリカに移住した。そして、1975年にアメリカの市民権を取得したのである。

話を元に戻すと、フォアマンにとって映画撮影のため故郷に帰るのは、大変危険であり複雑な思いがあったに違いない。アメリカに亡命したのであるから、チェコスロバキア政府側からみれば、反逆者ということになるのだ。

当時のチェコスロバキアは、共産党独裁政権を確立したグスターフ・フサーク大統領の厳しい統制下にあった。検閲・監視が横行する時代だったのである。しかし、「ビジネス」と割り切って、映画製作の許可をもらいに行った。

今やフォアマンは、アメリカ国籍を手にし、アカデミー賞を受賞した世界的に有名な監督なのだ。ハリウッド側は撮影の許可を得るため、多額の契約料を支払うことを約束し、撮影以外の活動は一切しないという条件のもとに、チェコスロバキア政府の協力を取りつけたのである。

撮影は1983年に、スタヴォフスケー劇場やフラチャニ広場の大司教宮殿、戦争博物館などを使って行われた。そして、どの場所にも秘密警察の監視の目が光っていたのである。

映画に携わった人々には、モーツァルトに対する尊敬の念があった。脚本を書いたシェファー自身も、スタヴォフスケー劇場を最初に訪れた時、モーツァルトが「ドン・ジョヴァンニ」を指揮して初演したその同じ場所に立てたこと



プラハのスタヴォフスケー劇場



プラハのフラチャニ広場にある大司教宮殿

に大感激して涙を流した。

オペラのシーンでは、500人以上のエキストラのかつらや衣装・メイクを必要としたが、物資不足のなか金に糸目をつけずに準備された。照明には、実に多くの実物のろうそくが使用された。火事の心配があるため撮影は、毎日消防士を30～40人待機させて行われたのである。エキストラの人々も撮影に自然に溶け込むことができ、リアリティのある素晴らしい場面になった。

このように映画「アマデウス」は、チェコスロバキアとプラハ市民の協力のもとに作られたのである。

私 と マ ム シ グ サ

会員番号 K.10 畠 山 久 雄

新型コロナウイルスが猛威を振るっている昨今、健康に気を遣って散歩する人にとって、人口密度の小さい秋田は恵まれた環境である。

(負け惜しみではない!) 街中の散歩も良いが、季節の変化を感じたい私は自然の中を歩くようにしている。最も多い散歩コースは秋田城址・寺内界限で、散歩の出発点は護国神社境内である。

境内を出て中世秋田城の東門をくぐり、有名な古代水洗トイレの脇を抜けて堂ノ沢に下りる。天気の良い日は途中の坂から鳥海山の雄姿を拝めるのも散歩の楽しみの一つである。車が通行できない急坂を下りるとそこは草生津川だ。下ったからには寺内兎桜を経由して高野へ、そして出発地点の護国神社に戻る。

自然の中であるから様々な植物とも顔馴染みになる。顔馴染みになるとどうしても名前を知りたくなる。最近、顔馴染みになったのは「マムシグサ」[写真1]である。最初は、とても珍しい植物を発見したのではとわくわくしたが、落ち着いて周囲を見渡すと、何と周囲にもあった。昔から散歩コースに存在した植物なのに、私が知らなかっただけなのである。

この植物を秋田県では「ヘビノバッコ」と言うウィキにある。「ヘビバッコ」とも呼んでいるようで、「ヘビの末娘」と言う意味のようだ。地方には方言があるから、かつては同じ植物が場所と共に名前を変えたり、名前が違うので別物と思っていたらそうではなかったり、植物学者達は呼び名を統一するだけでも大変なご苦労をされたと思う。

さて、見知らぬ植物に出逢ったら「この植物

の名前は何だろう」と名前を知りたくなる。いやいや、そんな変人は私だけかも知れない(汗)。名前を知ると親しみが湧いて再会が楽しみになる。いつの間にか植物を擬人化しているようで、少しずつではあるが知り合いが増えてきた。

ところで知人のハリエンジュ君であるが、明治5年に日本に輸入されて以降、長い間アカシア君と間違えられていたのだ。後に本物のアカシア君が『私がアカシアである』と名乗ったんだから、それまでのアカシア君をニセアカシアと呼ぶのも変だし、本物がマイナーであることを幸いに、昔の人は敢えて間違いを指摘しなかったようである。

その結果! 「札幌のアカシア並木」「アカシア蜂蜜」、西田佐知子のヒット曲「アカシアの雨がやむとき」に歌われる「アカシア」、北原白秋の「この道」に歌われる「あかしやの花」、



[写真1] マムシグサの仲間 (5月13日撮影)

さらに秋田県小坂町の花である「アカシア」等々、ニセアカシアがアカシアとして通用しているのだ。蜂蜜のラベルにもアカシヤ蜂蜜と記載されているが「これはニセアカシア蜂蜜である。」「ハリエンジュ蜂蜜である。」なんて営業妨害だよな。

なお、ふわふわしてポンポンとした黄色い花を咲かせる控えめなアカシア【写真2】に対し、ニセアカシア（ハリエンジュ）【写真3】は蝶のような形の白い花を咲かせ、とても良い香りがする。



【写真2】 本来のアカシア＝ギンヨウアカシア
(3月21日撮影)

話を戻そう。見たことがない植物に逢ったとき名前を知りたいと思うのは、人との出逢いにも似ると感じている。私とママシグサの出逢いは今年だったが、以前から存在を知っていた方も、ママシグサと逢っていない方もいらっしゃる。出逢いは偶々のことのようなのだが、相手が目に入らなければ出逢いはないのである。そう考えると散歩コースにも顔馴染みと、そうでないのがいて、なんて妄想し始めたのでこの辺で筆を置くことにします。



【写真3】 ニセアカシア（ハリエンジュ）（5月24日撮影）

酒とモツの日々 (45)

会員番号 K.488 佐藤 滋

「あ！ さい・・・」今朝もまたやってしまった。このごろ手ボケのせい、ボタンの掛け違いが多くなりました。しかもシャツの最後のボタンに来て、やっと気が付く始末。シャツならば始めからやり直せば済むことですが、人生ボタンの掛け違いに気づくのは人生の終わり近くになってからのこと。貴方に、悔やむことはありませんか？

MOZARTの伝記を読んでいると、今の社会通念から考えて「そのボタンは・・・」という件がたくさん出てきます。例えば幼い頃の有名な逸話。システィナ礼拝堂での秘曲ミゼレーレを一回聴いただけで記譜してしまった事件。これは今でいえばハッカー行為であり、秘曲を暴かれたバチカンには当然犯人を罰するはず。なぜできなかったのか？調べてみると、どうやら教会の権威が落ちて俗の才能にひれ伏してしまったらしい。彼は危ない行為をいろいろ経験しましたが、時代の運に救われたことも多かったようです。

人生は不可逆の現在進行形。生きている間は、その都度の判断でボタンをはめてゆくしかありません。MOZARTの判断。ボタンのかけ方はどうだったのだろう。もしコロレド大司教に我慢していたら？もしコンスタンツェと結婚しなかったら？・・・

私たちはMOZARTの伝記を読むたびにコロレドの意地悪さ、狭量さを批判する文章に出会いますが、もしMOZARTが今の「香港」「ロシア」「ミャンマー」に暮らしていたら直ぐに収監されたでしょう。何しろ自由を主張する無礼な不穏分子なのですから。隣の赤い大陸なら家族も収容所、將軍様の国なら一家銃殺もありえます。MOZARTの無謀さ、世間知らずが起こした数々の事件も独裁国家に暮らす人から見れば、簡単に自由を手にしたMOZARTが羨ましくてならないでしょう。お尻を蹴られて追い出されたそうですが、むしろコロレドの鷹揚さに驚嘆して「コロレドって良い人じゃん」と評価が一転するに違いありません。MOZARTの自由への旅立ちは、本人の気負いよりも、たまたま時代と環境がそれを許したと言えそうです。今、独裁政治の怖さは、今般の世界的パンデミックで一層身近なものになりつつあります。独裁国家が強力な権力を発動して都市封鎖や情報操作によって速やかにコロナを封じ込めたのに対し、民主主義国家では国民が自由と権利を主張した為に感染が拡大しました。世界を覆うパンデミックは、独裁国家にとっては世界征服の有効な手段ではないか。今回のコロナ禍は発生も含めて、実は独裁側の深謀遠慮なりハーサルではなかったのか、と勘ぐってし

まいます。

次の選択は結婚。厳格な父レオポルドと、奔放な婚約者コンスタンツェ。この二人の確執を前にMOZARTは何を思ったことでしょうか。一日一日生命の灯から遠ざかって行く老人と、若々しい生命の燃焼に悩まされているとさえ見える若い娘。父に従えば堅実な家庭を築けたかもしれない。が、彼の選択は育った環境とは真逆の明るい家庭でした。妻の浮気に悩まされながらも彼は幸福でした。そして彼の死後、コンスタンツェの後添いとなった男が、散逸した楽譜を収集整理し、後世へと引き継ぎます。ここでも彼の思いとは別のところでボタンは見事に収まったのです。

人はMOZARTの人生は不幸だったと評価

を下します。けれども、それは他者からの判断であって彼自身はどうだったのか。彼には、これが見合った人生だったのかもしれませんが。図抜けた才能は別として一人の、その時代、その国に生きた人間として、友に恵まれ、好きな酒を飲み、楽しい会話をして35年の生涯を精一杯生きた……。恵まれた、とは言えなくても、足るを知る相応の生涯と言えるのでしょうか。

才能の無い私たちは、それでも便利で平和な民主主義国に暮らし、豊かな自然と秋田の美酒に酔い、そして今MOZARTが自由に聴ける。それは多少、生活に不満があっても結構幸せなことではありませんか？ あなたの人生の衣……。多少サイズに不満があっても気にしないで……。ボタンはちゃんとはまっていますよ。

編集後記

正直新型コロナウイルス感染症の影響が大きく残るとは思ってもいませんでしたが、今を乗り切りまたみなで生演奏を聴けることを切望して過ごしましょう。さて我が家の3番目も吹奏楽をはじめ名トランペッター目指して練習に励んでいます（我が家6人家族ですが吹奏楽経験者が4人目）。今年はコンクー

ルも試行錯誤の上、どうにか開催できるように子どもたちにとってはよかったのかな、でも我慢を強いられるところもあり素直には喜べません。昨年と今年は何か大きな時代の変化の年なのでしょう。私たちも前を向いて進化しながら楽しく幸せに暮らしていきましょう。（K575）

「モーツァルト広場」ではいつでも会員を募っております（R3年6月現在90名）

モーツァルト広場

検索

入会金：¥2,000 年会費：¥3,000（諸会費、別途）ご紹介下されば幸いです。

お問い合わせ……〒010-0954 秋田市山王沼田町10-11-203 加藤 携帯電話 090(7939)4058

又は 本田（事務局）080(1673)8322